

①

# ジャパン・ツーリスト・ビューローと トーマス・クック社を結んだ猪股忠次

世界最古の旅行会社として知られるトーマス・クック社は、創業者のトーマス・クックが1841年に禁酒運動の一環として鉄道を利用した旅行を斡旋したのが最初とされています。クックが初めて来日したのは1872年に世界最初の世界一周旅行を催行した時です。その時の「私はイングランド、スコットランド、アイルランド、スイス、イタリアの湖という湖のほとんども訪れているが、瀬戸内海はそのどれよりもすばらしく、それら全部の最も良いところだけをまとめて一つにしたほど美しい」という言葉は広く知られています。

そして息子のジョン・メイスン・クックが初めて来日したのは1893年。その際に日本で初めてとなる支店を横浜に開設することについて賛同を得ます。実際に開設にこぎつけたのは1906年のことでした。

ジャパン・ツーリスト・ビュー

ローとクック社は以前から接点がありましたが、相互代理店契約を結んだのは1920年のことです。その背景には、ビューロー2代目の幹事である猪股忠次の存在がありました。猪股はビューローで勤務する以前、南満洲鉄道(株)で勤務していましたが、同社は鉄道やホテルを経営していたこともあり、外国語が堪能で国際事情に通じている社員を育成するため、猪股をクックに留学させました。2年間の留学で猪股は旅客事務について学び、日本人客がイギリスを訪れた際の世話役は全て猪股がおこなっていたという記録もあります。

猪股がビューローに転職する



猪股忠次

きっかけとなったのは、ビューローの設立総会を終えた直後、今後のビューローのあり方と事業内容を検討するためにヨーロッパ出張に出かけた生野團六(ビューロー初代幹事)とロンドンで再会したことです。生野からビューロー設立の話聞いた猪股は、生涯の仕事として自分も取り組みたいと希望します。生野も自分の後継者であることを確信しましたが、当時のビューローは営利会社ではなく好待遇がでないため、その時は積極的には勧めませんでした。大連に戻った猪股はホテル監督の業務にあたりましたが、1918年に生野に電報を送り、ビューローへの転職が実現します。

猪股がビューローに携わった

1910〜20年代は、第一次世界大戦、経済不況、インフレ、関東大震災などの悪条件が重なっていました。世界の周遊観光団船が相次いで日本に寄港する中、これまでの体制で斡旋業務

を行うことは限界があると感じた猪股は、クックで学んだ旅行斡旋業の知識やビジネスセンスを活かし、ビューローの当初からのねらいであった自己収入を上げる取り組みに力を入れていきます。

こうした背景のもと、クック社側の東洋支配人であったグリーン氏との間で何度も折衝を重ね、1920年に相互代理店契約の締結が実現します。これにより、外客への便宜を図るだけでなく、日本人が海外旅行をする際の各種手配もできるようになりました。

さらに、海外からの観光船一隻につき千円(のちに二千円)を收受する制度を打ち出したほか、1915年に鉄道院旅客課からビューローに異動した石田善太郎と協力しながら、内外の鉄道会社、汽船会社、旅行会社との代売、代理店契約の締結、デパートへの案内所進出、邦人への一般乗車券・遊覧券の発売、

旅行傷害保険、観劇券、旅行小切手、手荷物保険、日支小荷物ならびに日支邦文電報の取扱い等の新規事業を次々と実施して自己収入をあげていきました。

その他にも、クックやアメリカン・エクスプレス等主催の世界一周団体に職員を添乗させて斡旋業務の実際を習得させたほか、創業15周年にはビューロー主催のアメリカ視察団、世界一周視察団を送り出しました。

残念ながら、猪股は53歳という若さでこの世を去りますが、大正末期から主力業務となりつつあった乗車船券類の代売の業務はその後も強化され、第3代幹事の高久甚之助の時代になると、職員を170人から2800人に増加させ業務にあたりました。この方針はビューロー内でもさまざまな議論がありました。これが1963年の当財団と株式会社日本交通公社(現・(株)JT B)の分離につながっていくこととなります。

## 参考資料

- 『靴の塵』猪股忠次 猪股功、1929年
- 『回顧録』Japan Tourist Bureau、Japan Tourist Bureau、1967年
- 『故猪股忠次氏十三回忌追憶座談会』八木鐘次郎他、1940年
- 『この人々』青木槐三編、日本交通公社、1962年
- 『日本交通公社50年史』日本交通公社、日本交通公社、1962年
- 『日本交通公社七十年史』日本交通公社、日本交通公社、1982年